

# 平安京右京六条三坊六町跡

2004年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

# 平安京右京六条三坊六町跡

2004年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

# 序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生きています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来1200年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じて広く公開することで市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用をはかっていきたいと願っています。

研究所では、平成13年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平米から、数千平米におよぶ大規模調査までありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび会社施設建設に伴います平安京跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

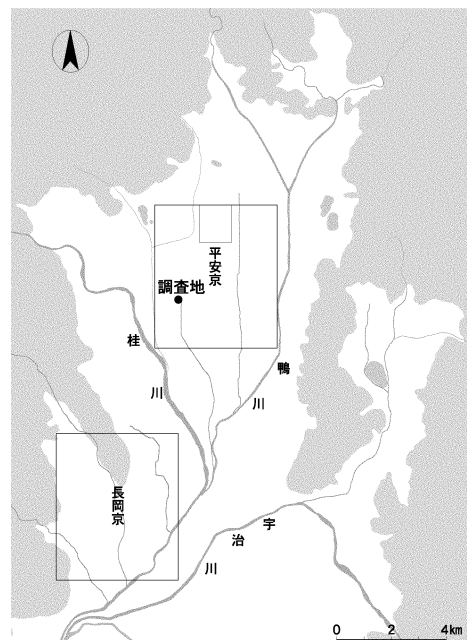
末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げます次第です。

平成16年7月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所  
所 長 川 上 貢

# 例 言

- 1 遺 跡 名 平安京右京六条三坊六町跡
- 2 調査所在地 京都市右京区西院西溝崎町14、22-2、23-1、23-2
- 3 委 託 者 株式会社 公益社 代表取締役 松井昭憲
- 4 調査期間 2004年4月19日～2004年6月11日
- 5 調査面積 580㎡
- 6 調査担当者 南 孝雄
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「西京極」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 日本測地系（改正前）平面直角座標系（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用基準点 京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点（一級基準点）を使用した。
- 11 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 12 遺 構 番 号 遺構の種類ごとに通し番号を付した。
- 13 遺 物 番 号 土器類、木器類、瓦類の順に通し番号を付した。
- 14 掲載写真 村井伸也・幸明綾子・網 伸也
- 15 遺物復元 村上 勉・出水みゆき
- 16 基準点測量 宮原健吾
- 17 本書作成 南 孝雄
- 18 編集・調整 児玉光世・清藤玲子・大立目 一
- 19 文字判読 人形の墨書文字判読は、京都大学の西山良平氏にお願いした。
- 20 木質鑑定 人形の木質鑑定は、京都大学生存圏研究所の伊東隆夫氏にお願いした。
- 21 人形については、奈良大学名誉教授の水野正好氏から多くのご教示を受けた。河角龍典氏からは発掘調査時に多くのご教示を受けた。記して謝意を申し上げる。



（調査地点図）

# 目 次

|                   |    |
|-------------------|----|
| 1 . 調査経過          | 1  |
| 2 . 遺 構           | 3  |
| ( 1 ) 層 序         | 3  |
| ( 2 ) 平安時代前期の遺構   | 3  |
| ( 3 ) 平安時代後期以降の遺構 | 8  |
| 3 . 遺 物           | 9  |
| ( 1 ) 土器類         | 9  |
| ( 2 ) 木器類         | 10 |
| ( 3 ) 瓦 類         | 12 |
| 4 . ま と め         | 13 |

# 図 版 目 次

|      |    |                      |
|------|----|----------------------|
| 図版 1 | 遺構 | 1 調査区全景（北西から）        |
|      |    | 2 建物SB 1（北から）        |
| 図版 2 | 遺構 | 1 井戸SE 1 人形出土状況（南から） |
|      |    | 2 井戸SE 1（東から）        |
|      |    | 3 流路SD35（北から）        |
| 図版 3 | 遺物 | SE 1・SD35出土土器        |
| 図版 4 | 遺物 | 1 SE 1 出土櫛           |
|      |    | 2 SE 1 出土瓢箪製杓        |
|      |    | 3 SE 1 出土人形          |

# 挿 図 目 次

|     |                 |   |
|-----|-----------------|---|
| 図 1 | 調査地位置図（1：5,000） | 1 |
| 図 2 | 調査前全景           | 2 |
| 図 3 | 調査風景            | 2 |

|     |                  |    |
|-----|------------------|----|
| 図4  | 北壁断面図(1:50)      | 3  |
| 図5  | 遺構実測図(1:200)     | 4  |
| 図6  | SB1実測図(1:100)    | 5  |
| 図7  | Pit36実測図(1:20)   | 6  |
| 図8  | Pit38実測図(1:20)   | 6  |
| 図9  | SE1・SB3実測図(1:50) | 7  |
| 図10 | SB4実測図(1:100)    | 8  |
| 図11 | SD35断面図(1:50)    | 8  |
| 図12 | SE1出土土器実測図(1:4)  | 9  |
| 図13 | SD35出土土器実測図(1:4) | 10 |
| 図14 | SE1出土木製品実測図(1:4) | 10 |
| 図15 | SE1出土人形実測図(1:4)  | 11 |
| 図16 | 瓦拓影・実測図(1:3)     | 12 |

## 表 目 次

|    |          |    |
|----|----------|----|
| 表1 | 周辺の調査一覧表 | 2  |
| 表2 | 遺構概要表    | 6  |
| 表3 | 遺物概要表    | 12 |

# 平安京右京六条三坊六町跡

## 1. 調査経過

この調査は、株式会社公益社による施設建設に伴うものである。調査対象地は平安京右京六条三坊六町跡の南西部に該当している。敷地の北半は、既存建物の基礎によって遺構面が破壊されていた。駐車場であった南半部分は、京都市埋蔵文化財調査センターの試掘調査によって遺構が遺存することが明らかとなったため、この範囲を調査することとなった。

周辺でのこれまでの調査は、右京六条三坊四町を中心に行われており、9世紀前半から10世紀前半にかけての掘立柱建物、井戸、町内道路が確認されている。ここでは、9世紀前半に1/2町規模の宅地であったものが、後半になって1町規模の宅地に変化している。掘立柱建物には南北棟の四面庇建物が存在し、寝殿造り成立期の建物として注目される。出土遺物に「佐」銘の墨書土器が出土しており、居住者との関係が指摘されている（図1 - 調査1～5）。

また近年、調査地北側の六条三坊七・八・九・十町では、ショッピングセンターの建設に伴って大規模な発掘調査（調査7）が行われ、平安時代の流路、樋口・馬代小路に伴う条坊遺構、掘

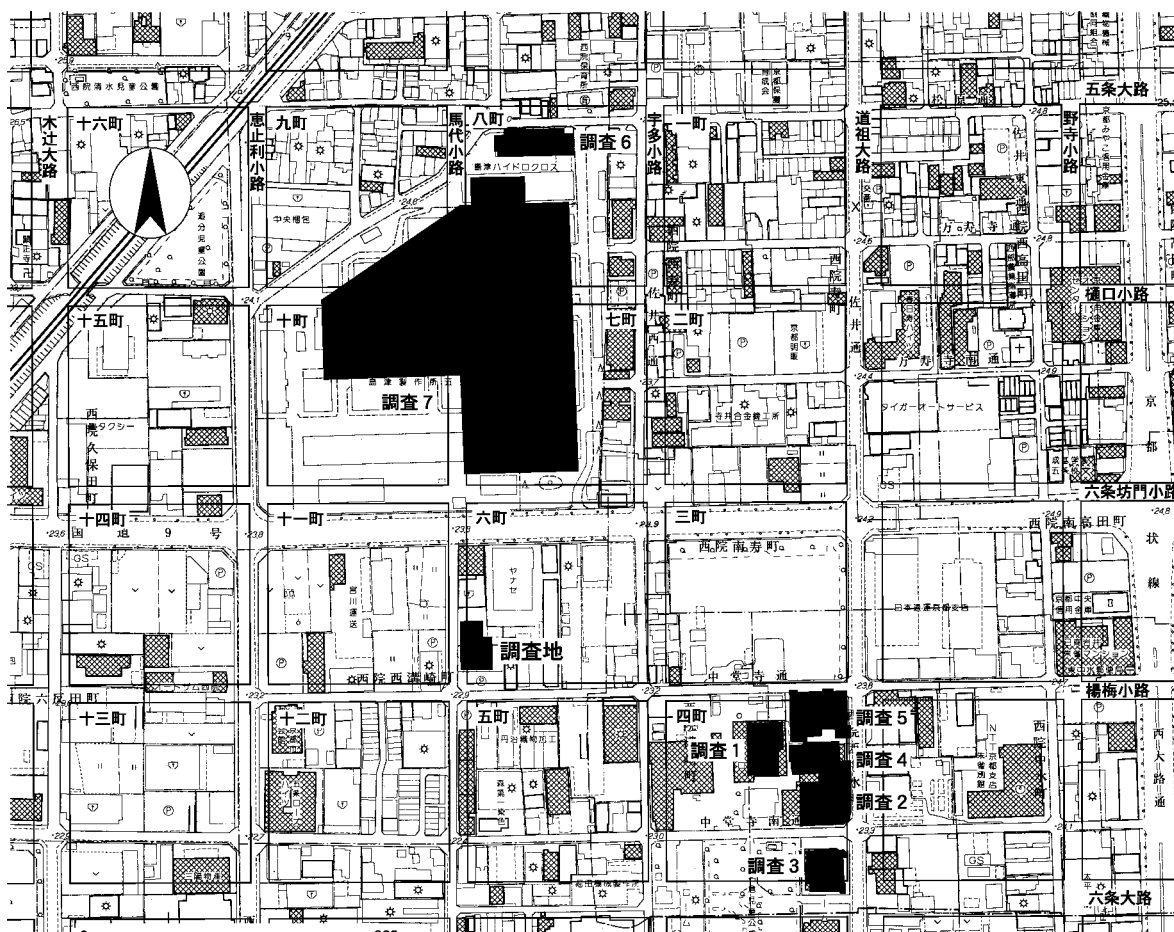


図1 調査位置図（1：5,000）



図2 調査前全景



図3 調査風景

立柱建物、町内道路などが検出され、1町規模の宅地の存在も明らかにされている。ここから出土した遺物には、「讃岐国苅田郡白米」などと記された木簡、人形や馬の骨などの祭祀遺物がある。遺構・遺物のあり方から京内官衙の可能性も指摘されている。また、明確な遺構には伴わないものの、縄文時代晩期、古墳時代の遺物も出土しており、付近にこの時期の集落の存在を窺わせる。

今回の調査は、調査区を馬代小路東側溝推定地を含むように、東西20m、南北30mに設定した。調査の結果、平安時代の掘立柱建物3棟、井戸1基、流路化した馬代小路、中世以降の素掘り溝などを検出した。なお、井戸からは人名が墨書された男女1組の人形が出土しており、当時の精神生活を知る上で貴重な資料を得た。

表1 周辺の調査一覧表

| No. | 調査地区 | 調査期間                     | 調査面積    | 文献  |
|-----|------|--------------------------|---------|---|
| 調査1 | 四町   | 1981.6.16<br>～1981.7.28  | 585㎡    | 鈴木廣司「右京六条三坊」『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1983年         |
| 調査2 | 四町   | 1986.11.19<br>～1987.2.7  | 943㎡    | 平尾政幸・梅川光隆「平安京右京六条三坊」『昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1989年 |
| 調査3 | 四町   | 1989.10.11<br>～1990.1.9  | 600㎡    | 菅田 薫「平安京右京六条三坊」『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1994年       |
| 調査4 | 四町   | 1993.2.4<br>～1993.3.27   | 500㎡    | 家崎孝治・梅川光隆『平安京右京六条三坊 ローム株式会社社屋新築に伴う調査』古代文化調査会 1998年            |
| 調査5 | 四町   | 1995.4.28<br>～1995.7.8   | 900㎡    | ”   |
| 調査6 | 八町   | 1990.9.10<br>～1990.12.1  | 818㎡    | 前田義明「平安京右京六条三坊」『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1994年       |
| 調査7 | 七～十町 | 2000.11.6<br>～2001.10.15 | 19,400㎡ | 堀内明博ほか『平安京右京六条三坊 平安京跡研究調査報告第20輯』(財)古代学協会 2004年                |



## 2. 遺 構

### (1) 層 序

調査地は、調査前までは駐車場であり、全体が東側の道路（馬代通）とほぼ同じ高さに整地が為されていた。調査地が駐車場となる以前は水田であり、調査区の南北中央付近（X=-111,760付近）で畦によって北側と南側に分かれ、北側が一段高くなっていたようである。調査ではこの畦に伴う溝を確認している。このため、遺構面までの深さは北側と南側で若干異なっている。駐車場の盛土下の旧耕土層は、調査区北側では標高21.6m付近で、南側では21.4m付近で検出している。この下には、中世の耕作土と考えられる灰色泥土層が0.1～0.2m堆積し、黄褐色砂泥層の遺構面となる。灰色泥土層は調査区の南半ではあまり残っていない。調査区南北中央での水田区画の違いにより遺構面は、調査区北半は地表面から約0.5m、南側では1.0～1.5mで検出した。遺構は、平安時代前期、平安時代後期、鎌倉時代以降のものをすべて同一面で検出している。以下、時期の順に述べる。

### (2) 平安時代前期の遺構

建物SB1（図6） 調査区北側で検出した。身舎2間×5間に両庇の付く南北棟建物。身舎柱間は梁間、桁行ともに2.4m（8尺）の等間。庇の出は東側が2.7m（9尺）、西側が3m（10尺）。身舎の柱穴は、掘形が一辺1.0～1.2mの方形、深さは0.6mを測り、柱抜き取り痕跡から推測される柱径は0.3～0.4mである。柱抜き取り方向に方向性はない。東庇の柱穴は、掘形が一辺0.6mの方形、深さは0.3mを測り、柱痕跡から推測される柱径は0.2～0.3mである。西庇の柱穴は、東側よりも小さく、掘形が一辺0.5mの方形、深さは0.3m。西庇は、柱穴が東庇柱穴よりも小さいことから、ある段階で増設された可能性がある。この西庇の柱穴掘形の底部では、直径10cmの杭の痕跡を検出している。建物建設時の基準となる杭の可能性もある。また、西庇柱列の北側延長線上3.3mの地点では、柱穴1基を検出しており、西庇はこの北側に存在する柵と連続している可能性がある。

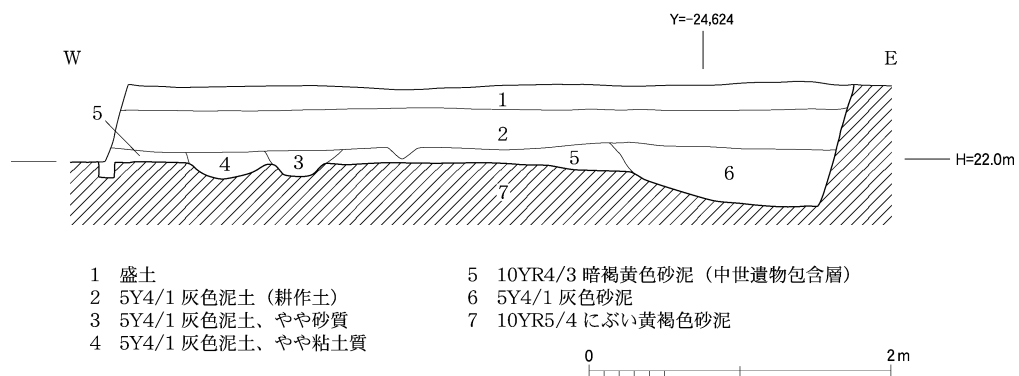


図4 北壁断面図（1：50）

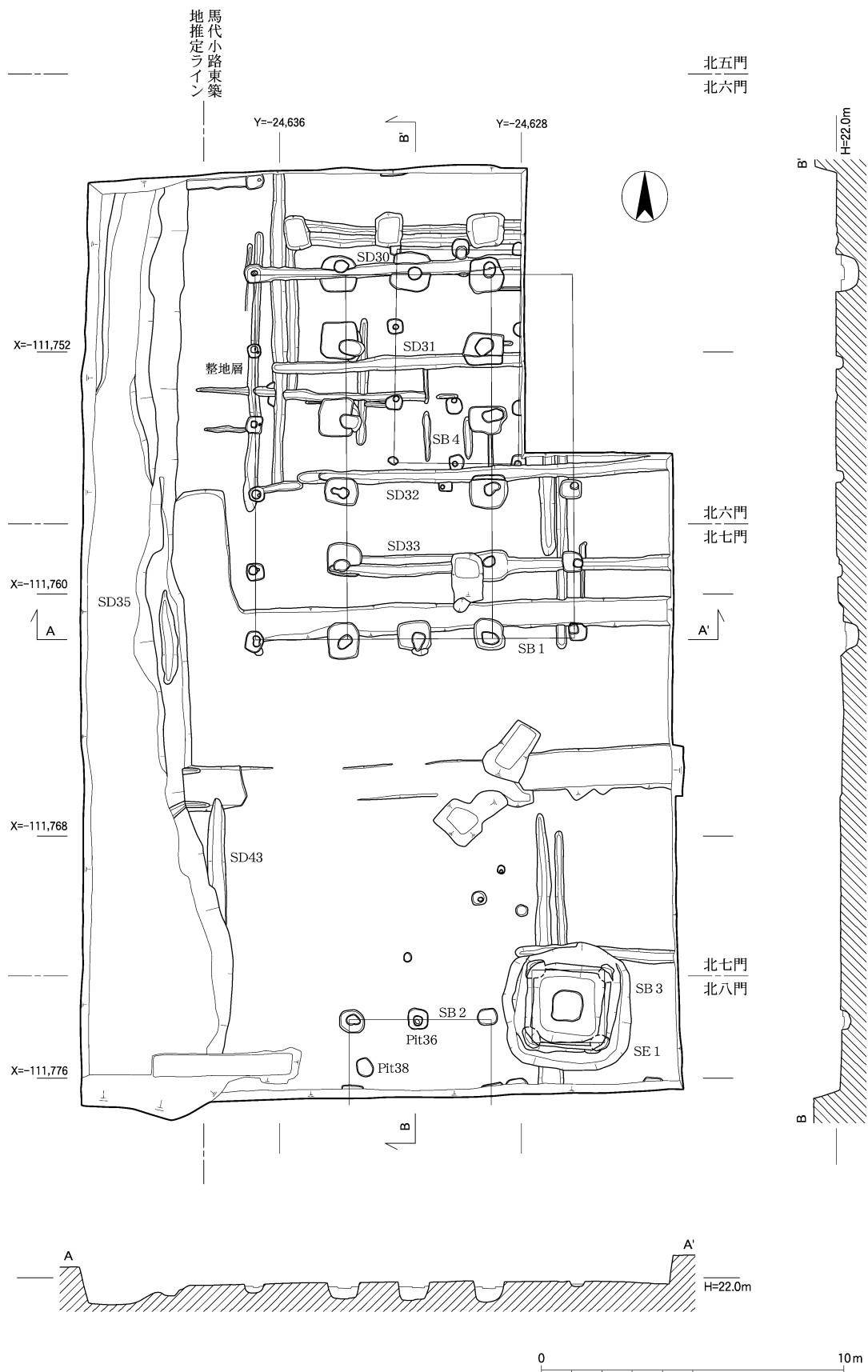


図5 遺構実測図(1:200)

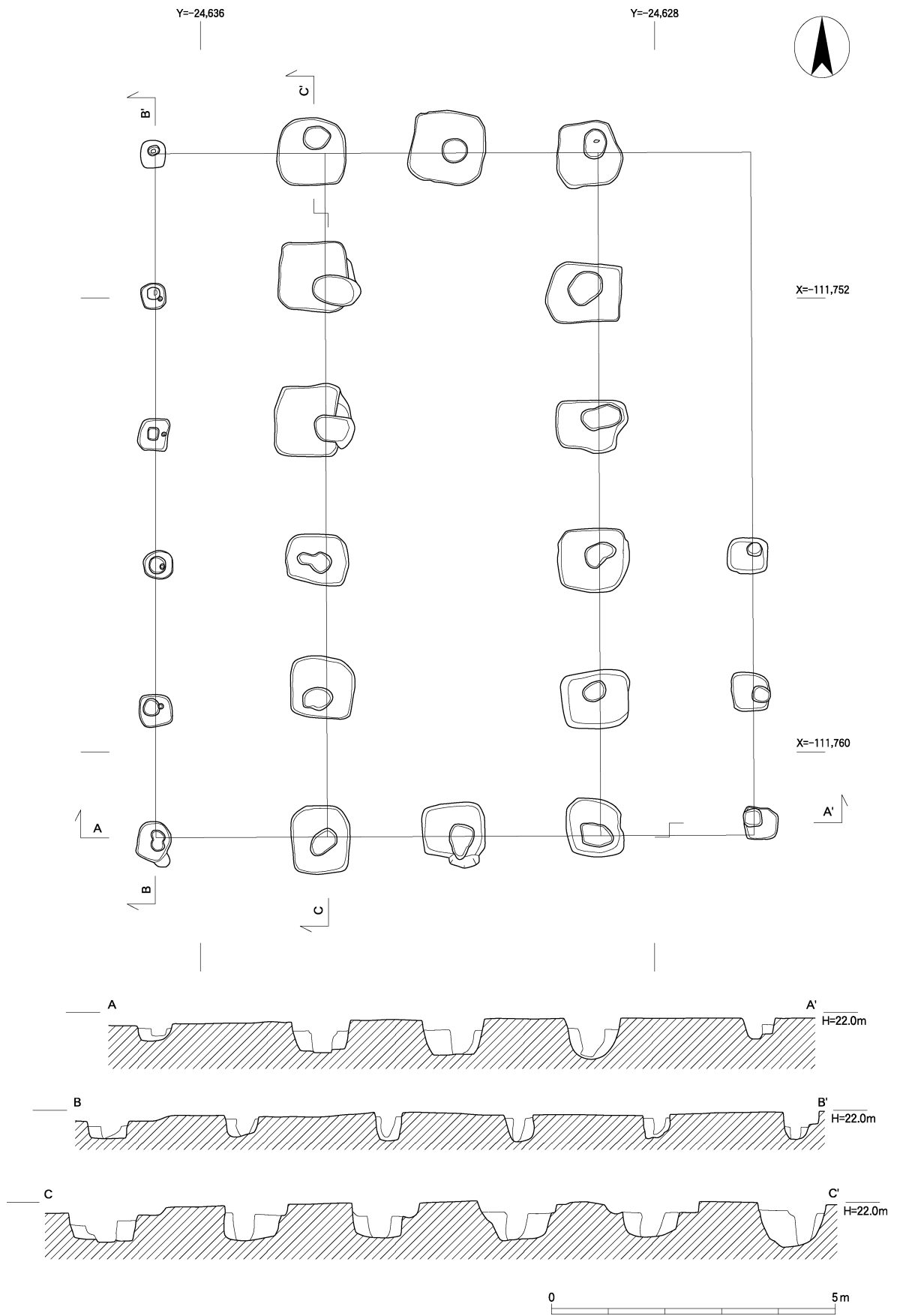


图6 SB1 实测图 ( 1 : 100 )

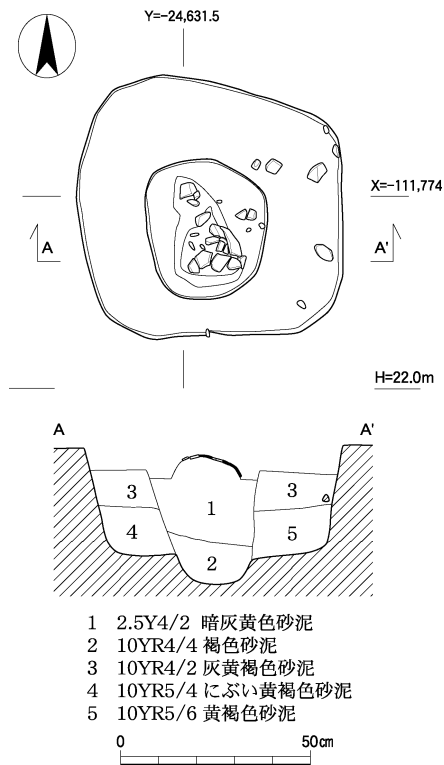


図7 Pit36実測図(1:20)

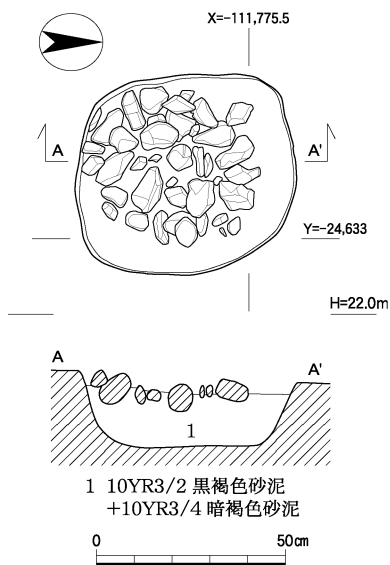


図8 Pit38実測図(1:20)

建物SB 2 調査区の南側で建物の一部を検出した。柱間は梁間、桁行ともに2.4m(8尺)。柱穴掘形は一辺0.7mの方形、深さは0.4mを測り、柱痕跡から推定される柱径は0.3mである。東側柱列がSB 1の身舎東柱列と筋が揃うことから同時期の建物と考えられる。柱列の中央の柱穴(Pit36)には柱を抜き取った後、土師器皿をふせて置いている(図7)。

井戸SE 1(図9) 調査区の南東部で検出した。掘形は上面で4.2m、底部で1.9m、深さは1.8mを測る。掘形の四隅には井戸覆屋SB 3の柱穴があり、柱間は2.4m(8尺)。井戸枠は抜き取られており遺存しない。底部には径1mの水溜があるが、これの枠材も残されていない。井戸枠の形状・規模を復元することは難しいが、一辺1.5m程度の方形板組であった可能性が高い。掘形埋土は、枠材抜き取り時に大きく掘り返されており、ほとんど残されていない。枠内での枠材抜き取り前の堆積は、水溜部に一部認められるのみであり、それより上は枠材抜き取り後の埋め立て土である。1~3層はやや酸化しており、井戸埋め立て後に順次堆積したと見られる。4・5層は細分される可能性があるが、掘り下げ作業時の差し水が激しく、確認することはできなかった。この4層の中位より男女1組の人形が頭を東にして、南北に約0.5m離れて出土している。12・16層からは遺物がまとまって出土し、土師器、「吉」銘墨書土器、斎串、櫛、瓢箪などがある。墨書土器や斎串は井戸埋め立て時の祭祀に使用したものを埋めたとみられる。4層と12・16層以外では遺物がほとんど出土しなかった。

溝SD43 幅0.5m、深さ0.1mを測る南北方向の溝。平安時代後期のSD35に切られており、これ以前の遺構であ

表2 遺構概要表

| 時代       | 遺構                                 |
|----------|------------------------------------|
| 平安時代前期   | 建物SB 1・2、井戸SE 1、覆屋SB 3、溝SD43、整地層 1 |
| 平安時代後期以降 | 建物SB 4、流路SD35、溝SD30~33             |

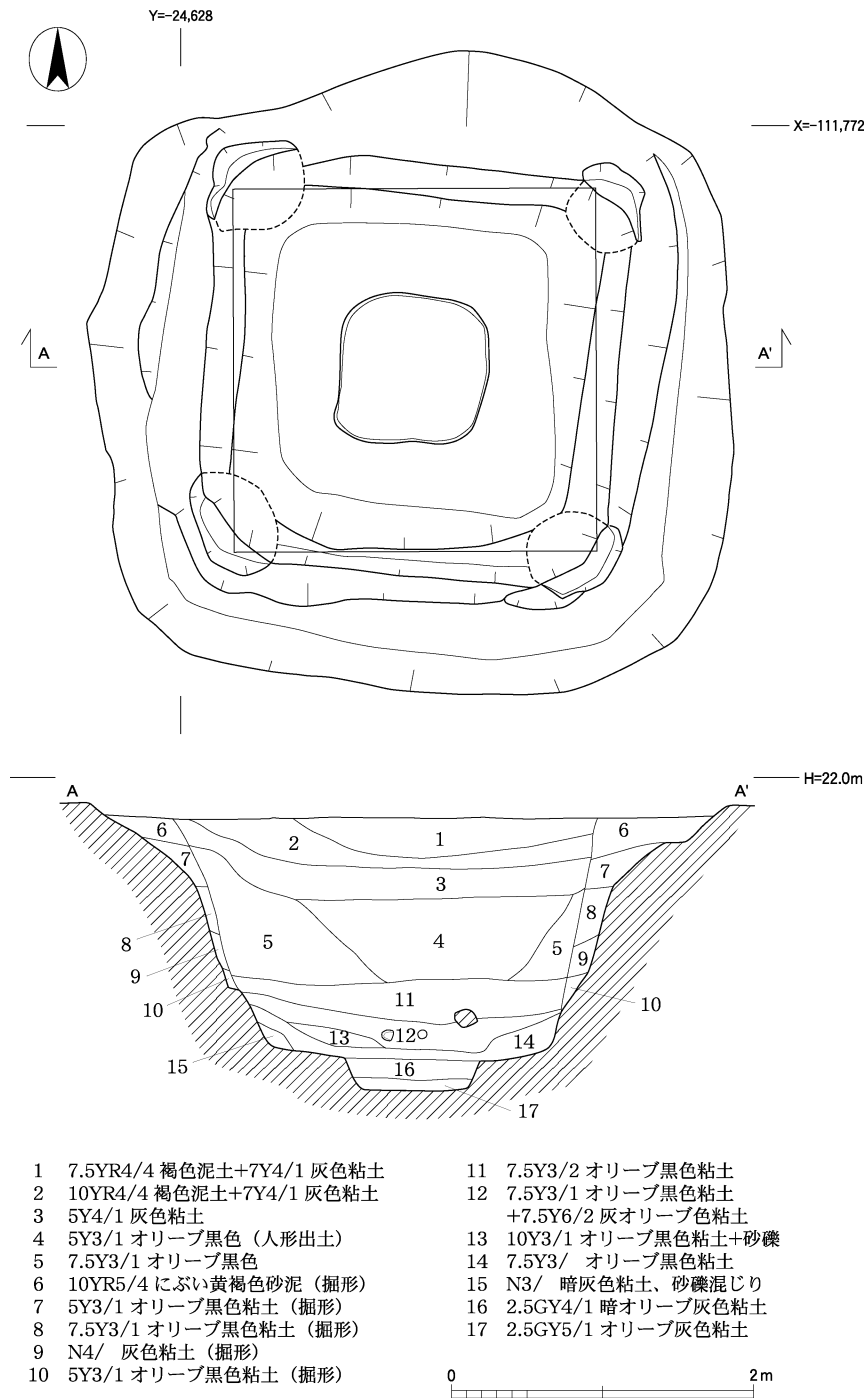


図9 SE1・SB3実測図(1:50)

ることがわかる。馬代小路東築地推定ライン近くに存在することから、馬代小路東築地内溝である可能性がある。

整地層1 SB1の北西部で検出した。このあたりは、地山の黄褐色砂泥層がわずかに西下がり傾斜しており、これを平坦にするため、SB1造営時に成された整地によるものと思われる。厚さ5~10cm。この整地層の西端は、馬代小路東築地推定ラインで止まっている。

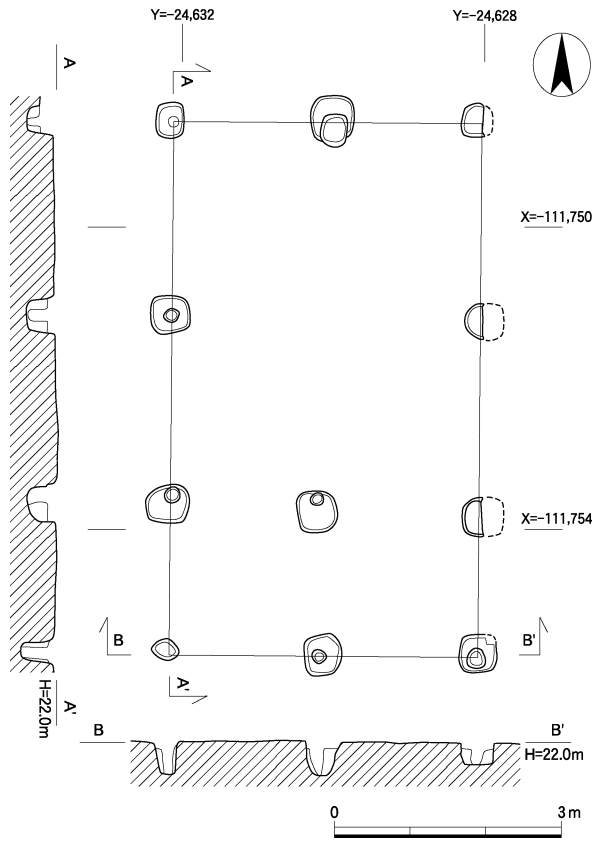
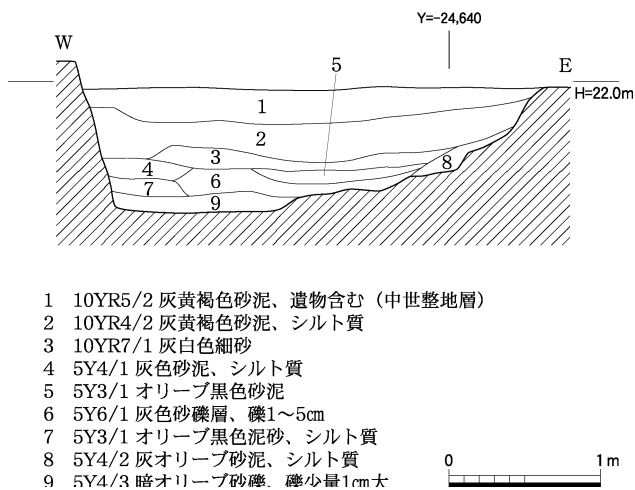


図10 SB4実測図(1:100)



- 1 10YR5/2 灰黄褐色砂泥、遺物含む(中世整地層)
- 2 10YR4/2 灰黄褐色砂泥、シルト質
- 3 10YR7/1 灰白色細砂
- 4 5Y4/1 灰色砂泥、シルト質
- 5 5Y3/1 オリーブ黒色砂泥
- 6 5Y6/1 灰色砂礫層、礫1~5cm
- 7 5Y3/1 オリーブ黒色泥砂、シルト質
- 8 5Y4/2 灰オリーブ砂泥、シルト質
- 9 5Y4/3 暗オリーブ砂礫、礫少量1cm大

図11 SD35断面図(1:50)

### (3) 平安時代後期以降の遺構

建物SB4(図10) SB1と重なる位置で検出した。身舎2間×3間の建物。身舎柱間は、梁間が2.1m等間、桁行が北から2.55m、2.55m、2.1m。柱穴の規模は一辺0.5mの方形、深さは不揃いで0.3~0.5mを測る。柱径は0.2m。出土遺物がなく、時期は確定しがたい。

流路SD35(図11) 調査区東側で検出した流路。幅5m以上、深さ0.5~0.6mを測る。流路の西肩は、調査区外になる。馬代小路の道路部分全面が川と化しており、直線的な流れは人工的に掘削したものであることが明らかである。出土する遺物は、平安時代前期と後期に分かれ、出土層位に差はなく、遺構の時期としては平安時代後期と考えられる。

溝SD30~33 調査区北半で検出した東西方向の素掘りの溝。溝と溝との距離は3.3mの等間隔。それぞれ幅0.4m、深さ0.3m。時期は明らかでないが、重複関係から、今回検出した素掘り溝では最も古い一群である。

### 3. 遺物

遺物は整理箱にして13箱出土している。全体に遺物の出土量は少ない。平安時代の土器類、瓦類、木製品が主に出土している。また、細片のため図示できていないが、古墳時代前期の山陰系の鼓型器台と思われる土師器も出土している。

#### (1) 土器類

土器類は平安時代前期のものが多く、その内訳は土師器、須恵器、黒色土器が主で、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器は細片を含めてもほとんどない。まとめて出土しているのはSE 1からであり、その他から出土した土器は細片が多く、<sup>1)</sup>図示できるものはほとんどない。

##### SE 1 出土土器 (図12)

(1~11)は土師器。(1)は口径14cm前後の皿A。口縁部を横ナデし、やや外反する。体部下半はヘラ削りを施すが、その単位は明瞭ではない。(2)は皿A。外面全面をヘラ削り。内面は横ナデを施すが、底部の一部にはハケが残る。(3・4)は土師器皿。外面底部から口縁まではヘラ削り、口縁部には横ナデを施す。(5~7)は椀A。いずれも外面調整はヘラ削りであるが、(7)は磨滅しており調整単位は図化できない。また、(7)は、(5・6)に比べると器高がやや低く、口縁端部が小さく屈曲するなど、やや新しい様相が見られる。(8・9)は杯A。ともに口縁部は横ナデ、外面口縁以下は底部までヘラ削り。(9)の方がヘラ削りの単位は小さい。(10)のみが掘形より出土。外面調整は磨滅により不明。(11)は甕。外面はハケ調整、頸部より上は横ナデ。内面はハケ後ナデ。

(12~14)は須恵器。(12)は杯A、外面底部と体部の2箇所に「吉」の墨書がある。(13・14)

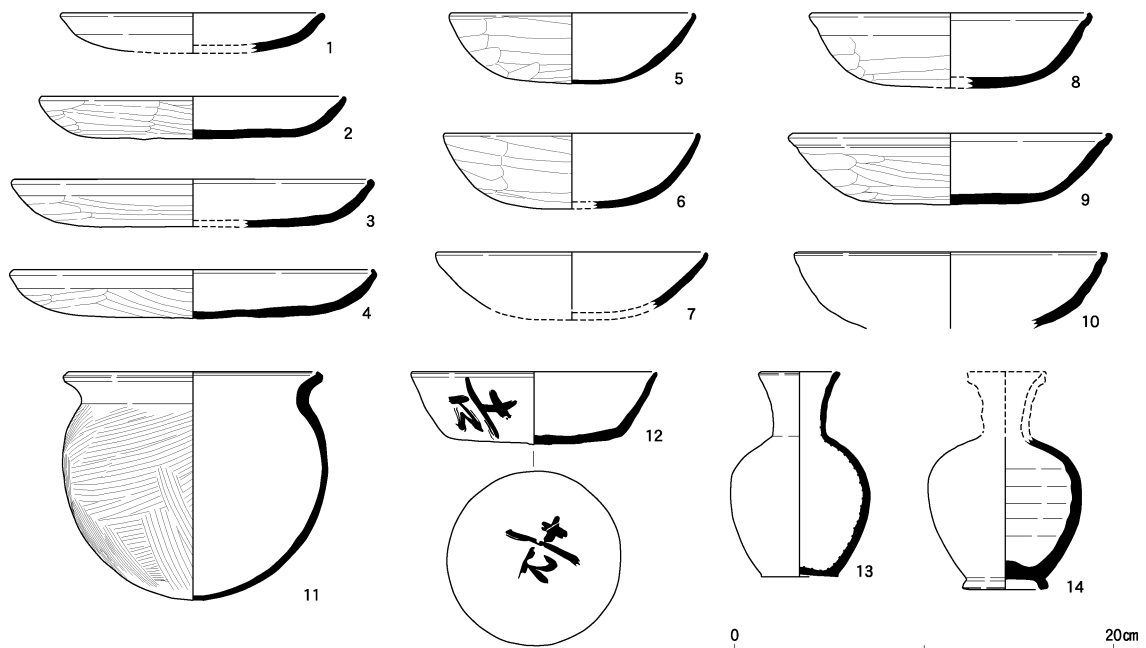


図12 SE 1 出土土器実測図 (1 : 4)

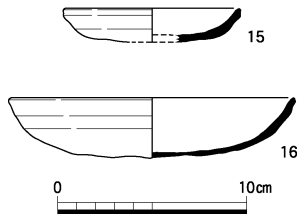


図13 SD35出土土器実測図  
(1:4)

は壺M。(13)は外面底部系切り。SE1出土の土器は型式的には期中段階に属する資料とみられる。

SD35出土土器(図13)

SD35からの遺物の出土量は極めて少ない。層位に関係なく平安時代前期の遺物と後期の遺物が出土した。前期の遺物には須恵器の壺が多い。(15・16)は皿N。ともに磨滅が激しい。

## (2) 木製品

木製品はSE1より出土した。人形、斎串など祭祀に関連すると思われるものが目に付くが、櫛、柄杓の柄、瓢箪製の杓、曲物なども出土している。以下に図化し得たものについて述べる。

SE1出土木製品(図14・15)

(17・18)は横櫛。(17)は残存幅5cm、高さ3.9cm、厚さ0.7cm。(18)は残存幅6.7cm、高さ4.2cm、厚さ0.6cm。いずれも櫛の引き出し線が背上縁に対して直線をなす。櫛歯数は11条/cm。<sup>2)</sup>

(19)は瓢箪製の杓。柄の部分は別に出土したが、形態や大きさから(19)に取り付くものと判断した。復元長約16.5cm、最大幅約10.0cm。蔓のついていた部分に直径0.9cmの円孔をあけ、底部の雌しべの痕跡のふくらむ部分にも直径0.6cmの円孔をあけ柄を差し込む。他の出土例からみて、括れのない体部側面の一部を切断し、楕円形になる口を設けたものとみられる。<sup>3)</sup>細片のため図化できていないが、他に1点出土している。

(20)は斎串。板材上端を圭頭状に下端を剣先状に削り、上端近くの左右に切り込みを設ける。

(21・22)は立体形の人形。(21)は男性像。高さ23cm、幅約4cm、厚さ約2.5cm、一木を削りだして立身を表している。両腕は、別材で作られ木釘で固定し後ろ手に回る。頭部には烏帽子状の

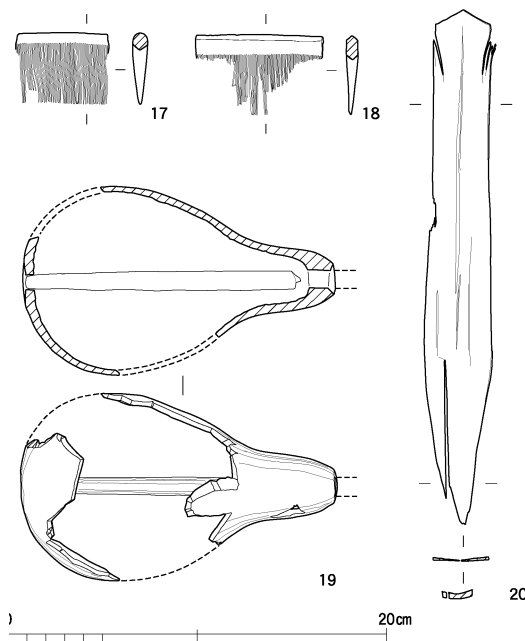


図14 SE1出土木製品実測図(1:4)

被物を、顔部は目・鼻・口を削り出す。墨描きによって睫毛、瞳、口髭、顎髭が表現される。胸部から腹部にかけては「葛井福万呂」と2行墨書されており、墨書の後、腹部と膝部の一部は鋭利な刃物状の工具によって削りとられている。(22)は女性像。高さ16.5cm、幅2.5cm、厚さ1.5cm、男性像と同様に一木で削りだして立身を表している。腕の部分は欠損しているが、体部側面上方に木釘痕跡が認められ、本来は男性像同様に両腕が存在したとみられる。頭部は、髪を結びまとめており頭上一髻と思われる。胸部、腹部はやや膨らみ、ふくよかに表現されている。胸部から腹部にかけて「<sup>(前カ)</sup>檜阿古」と記されている。木質は2体ともに杉材。



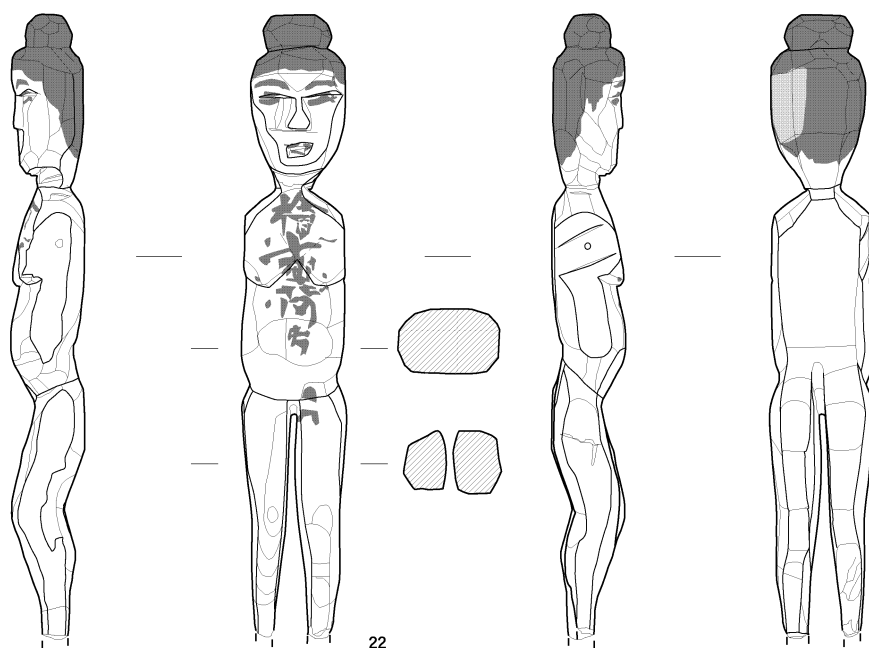
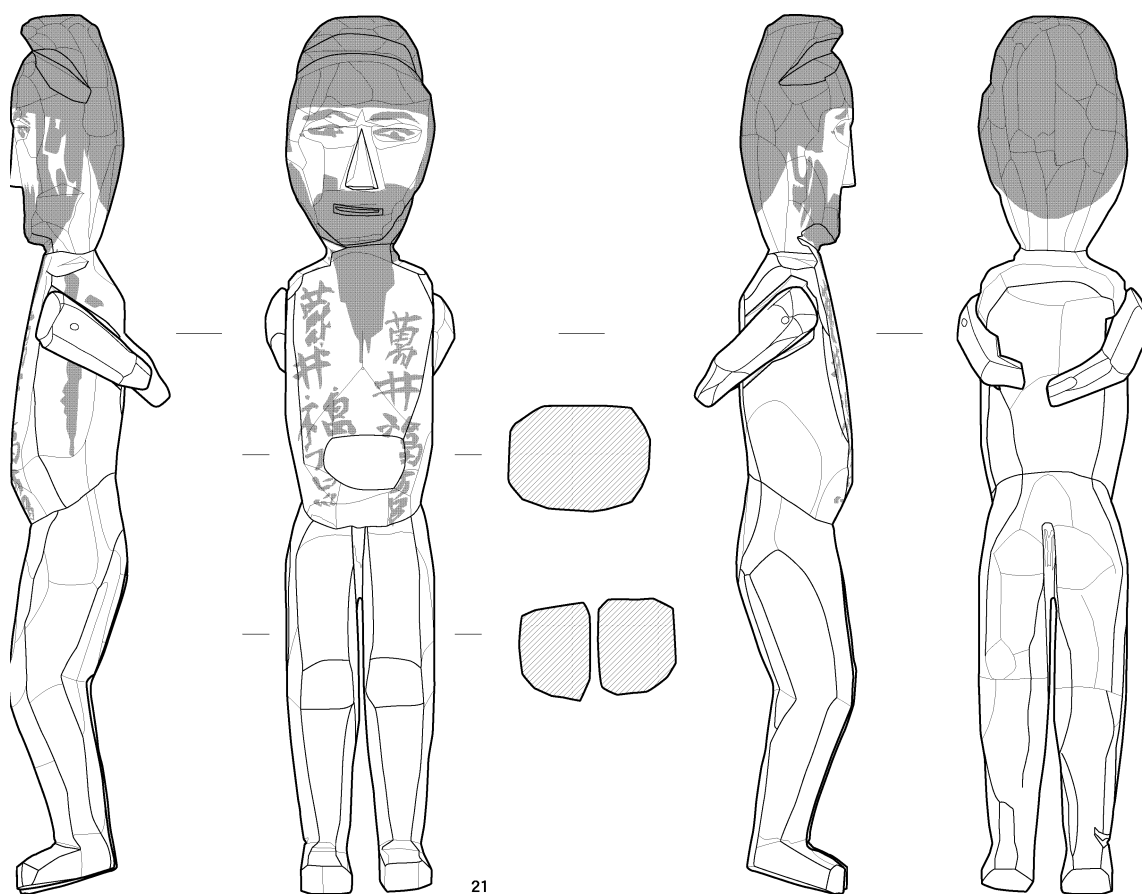
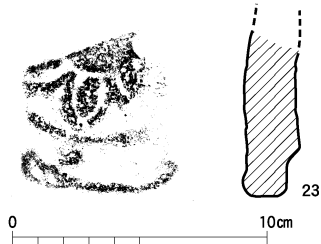


图15 SE 1 出土人形実測图 ( 1 : 2 )



### (3) 瓦類

瓦は、SE1・SD35などから出土しているが、量は少なくすべてが小片である。

SD35出土瓦(図16)

(23)は蓮華文軒丸瓦。全体に磨滅が激しく、胎土に砂粒を若干含み、色調は灰白色、焼成は堅緻。平安時代中期。

図16 瓦拓影・実測図(1:3)

註)

- 1) 出土土器の形式と編年は以下による。小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要 第3号』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 2) 辻 裕司「横櫛 横櫛の分類と生産遺跡」『研究紀要 第7号』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2001年
- 3) 平安京でのひょうたん製柄杓は右京五条二坊九町からの出土例がある。  
定森秀夫・植山 茂・山下秀樹『平安京右京五条二坊九・十六町』京都文化博物館 1991年

表3 遺物概要表

| 時代            | 内容                         | コンテナ箱数 | Aランク点数             | Bランク箱数 | Cランク箱数 |
|---------------|----------------------------|--------|--------------------|--------|--------|
| 古墳時代前期        | 土師器                        | 少量     |                    | 少量     | 0箱     |
| 平安時代前期        | 土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、木製品 | 13箱    | 土師器11点、須恵器3点、木製品6点 | 1箱     | 8箱     |
| 平安時代中期        | 土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、軒丸瓦 | 少量     | 軒丸瓦1点              | 0箱     | 少量     |
| 平安時代後期        | 土師器、須恵器                    | 少量     | 土師器2点              | 0箱     | 少量     |
| 鎌倉時代<br>～室町時代 | 土師器、青磁                     | 少量     |                    | 少量     | 少量     |
| 合計            |                            | 13箱    | 23点(4箱)            | 1箱     | 8箱     |

## 4.まとめ

調査対象地は平安京右京六条三坊六町跡の南西部に該当する。今回の調査で検出した主な遺構には、9世紀前半の建物、井戸などで構成される宅地の一部と平安時代後期の流路に作り替えられた馬代小路がある。

9世紀の遺構は、SB1～3、SE1などからなる。SB1・2はそれぞれ南北棟の掘立柱建物で、身舎の東側柱列が揃うことから同時期の建物と判断される。また井戸SE1もこれに伴う施設とみられ、これらは一つの宅地の一部であることがわかる。遺構の時期は、SE1から出土した土器によって9世紀の前半には廃絶しており、平安遷都当初の宅地である。SB1は2面庇の南北棟建物で、西庇は後になって増設された可能性がある。身舎の柱は大型のものであり、身舎の柱穴は掘形が一辺1.0～1.2m、柱抜き取り痕跡から推測される柱径は0.3～0.4mある。この柱規模は、同時期の右京一条三坊九町、右京三条三坊五町（淳和院）などの1町規模邸宅の建物遺構や、天皇の京内離宮で確認されている掘立柱建物の柱規模に匹敵する<sup>1)</sup>。ただし、これらの遺構の桁行柱間は3.0m（10尺）であるのに対し、今回検出されたSB1の桁行柱間は2.4m（8尺）であり、建物として格が低いことは確かである。また、南北棟建物であることから宅地の主屋ではなく、副屋的な建物であった事も推定できる。長岡京からの再利用建物の可能性も考えられる。ただ、この南北棟建物に両庇をつけ建物の床面積の拡充と空間分化を図っている例は、平城・長岡京ではあまり例が無く、平安京での傾向を表している早い例として注目される<sup>2)</sup>。宅地規模については、調査面積が限られており推定できない。また、整地層1の西端は、馬代小路東築地推定ラインで止まっており、馬代小路と宅地とは築地、柵などの区画施設で遮蔽されていた可能性がある。

井戸SE1から出土した男女1組の人形は、その立体的な作りとそれぞれに人名が記されていた点など、今まで類例のないものである。出土状況から井戸破棄時に行われた祭祀とは別の目的を持って埋納されたものとみられる。男女の人形が同一遺構から出土した例として、平城京左京一条三坊十三坪がある。ここでは、9世紀中頃から10世紀にかけての井籠横板組の井戸から100枚近くの人形がまとめて出土している。人形は扁平な板材に切り込みを入れ頭・肩・足などを表し、墨描きによって顔を表現する。胴部には「伊勢竹河」や「伊勢宗子」などと墨書がなされる。6～8枚を釘や紐状のものによってまとめられている<sup>3)</sup>。平安京では右京六条三坊七町の9世紀前半の流路SR4200から扁平な板材によって作られた人形が出土している<sup>4)</sup>。また、右京八条二坊の西鞠負小路下層の9世紀初頭の流路からも薄板によって作られた人形やこけし型の人形が出土している<sup>5)</sup>。これらは同一のものが多量に使われていることや流路で出土していることから、祭祀を行った施主が自らの被えのために行ったと考えられている。元興寺極楽坊の祭文を検討された紫田實氏によれば、男女和合を願う際は男女の人形を面あわせにして祭り、男女離別を願う際は後ろ合わせにして祭るとされている<sup>6)</sup>。今回の人形の出土状況、人形の精密な作り方などはこれらとは異なっており、その目的も異なっている可能性が高い。形状からみれば両腕を後ろ手に回している点が注目され、或いは呪いの道具であった可能性も考えられる。胴部に記された人名の葛井氏

は、河内国志紀郡を本拠とした渡来系氏族であり、平安時代は下級官人として、一族の一部が右京に居住したことが知られている<sup>7)</sup>。女性像に墨書された「檜前」も明日香を本拠とした渡来系氏族檜隈氏に関連するとみられる。墨書された人名が、この宅地の居住者であったのか、あるいはその関係者であったのか結論は出せないが、いずれにしてもこの人形は、9世紀初頭の平安京に居住した人々の精神生活を物語る上で極めて重要な資料である。

馬代小路は、平安時代後期には路面部分全面が河川SD35となっていることが判明した。この状況は、今回の調査地の北側、七町域の調査でも確認されている。ここの調査では、七町北側の東西道路樋口小路が河川化し、これが七町北西部で直角に曲がり馬代小路を川にしている。ただし、その時期は、樋口小路部分の川の埋土から9世紀の遺物がまとまって出土することから、この時期から川として存在していたとされている。前述したように今回の調査でもSD35からは9世紀の遺物と12世紀の遺物が出土しているが、層位に関係なく出土しており、今回の調査成果からは、遺構の時期は平安時代後期とみることが妥当である。河角龍典氏によれば、11世紀以降、平安京を取り巻く河川である鴨川や桂川には段丘化の進展、河床の低下、氾濫源の減少などの変化がみられ、その結果、その流域では都市域や耕作地の拡大が進展したとされる。一方、今回の調査地である紙屋川流域では、段丘化しなかったため、これ以前と同様に氾濫源が広がり、土地利用が難しくなったとされている<sup>8)</sup>。一般に11～12世紀の右京は、その大半が耕作地と化していたとされているが、そのなかには宅地も存在したことが最近の発掘調査で明らかになってきている。今回、確認された馬代小路の河川化は、このような右京域の土地利用状況の中で、紙屋川流域で行われた平安時代後期の右京における基幹排水路の整備と捉える事も可能ではないだろうか。

註)

- 1) 平安京における9世紀の大型建物は以下の論考に詳しい。  
網 伸也「平安時代初期の大規模宅地造成について」『研究紀要 第1号』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 2) 南 孝雄「平安京掘立柱建物の特性 ～庇付き建物の展開～」『研究紀要 第1号』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 3) 松浦五輪美・原田香織「平城京跡左京一条三坊13坪」『木簡研究』第22号 2000年
- 4) 堀内明博ほか『平安京右京六条三坊 平安京跡研究調査報告第20輯』(財)古代学協会 2004年
- 5) 辻 裕司・近藤知子「平安京右京八条二坊」『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996
- 6) 『日本仏教民俗資料集成 第六巻 元興寺極楽坊』1975年
- 7) 佐伯有清『新撰姓氏録の研究 考證編 第五』1983年
- 8) 河角龍典「平安京における地形環境変化と都市的土地利用の変遷」『考古学と自然科学』第42号 2001年

# 圖 版

# 報 告 書 抄 録

|        |                             |
|--------|-----------------------------|
| ふりがな   | へいあんきょううきょうろくじょうさんぼうろくちょうあと |
| 書名     | 平安京右京六条三坊六町跡                |
| シリーズ名  | 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報           |
| シリーズ番号 | 2004-2                      |
| 編著者名   | 南 孝雄                        |
| 編集機関   | 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所            |
| 所在地    | 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1   |
| 発行所    | 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所            |
| 発行年月日  | 西暦2004年7月30日                |

| ふりがな<br>所収遺跡名   | ふりがな<br>所在地   | コード   |      | 北緯                | 東経                 | 調査期間                          | 調査面積 | 調査原因       |
|---|---|-------|------|-------------------|--------------------|-------------------------------|------|------------|
|   |   | 市町村   | 遺跡番号 |                   |                    |                               |      |            |
| へいあんきょううきょう<br>平安京右京<br>ろくじょうさんぼう<br>六条三坊<br>ろくちょうあと<br>六町跡 | きょうとしうきょうく<br>京都市右京区<br>さいいんにしみぞぎちょう<br>西院西溝崎町<br><br>14、22-2、<br>23-1、23-2 | 26100 |      | 34度<br>59分<br>32秒 | 135度<br>43分<br>49秒 | 2004年4月<br>19日～2004<br>年6月11日 | 580㎡ | 会社施設<br>建設 |

| 所収遺跡名                | 種別 | 主な時代   | 主な遺構     | 主な遺物          | 特記事項                                    |
|----------------------|----|--------|----------|---------------|---|
| 平安京右京<br>六条三坊<br>六町跡 | 都城 | 古墳時代前期 |          | 土師器           | 平安時代初期の宅地の一部を確認した。<br>男女1組の立体的な人形が出土した。 |
|                      |    | 平安時代前期 | 掘立柱建物、井戸 | 土師器、黒色土器、須恵器  |   |
|                      |    | 平安時代中期 |          | 土師器、灰釉陶器、緑釉陶器 |   |
|                      |    | 平安時代後期 | 流路、溝     | 土師器           |   |
|                      |    | 中世     |          | 土師器、青磁        |   |

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004-2

## 平安京右京六条三坊六町跡

発行日 2004年7月30日

編集発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1  
〒602-8435 075-415-0521  
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地  
〒604-0093 075-256-0961